

体験的・社会的な取組を通して課題意識や実践的意欲を高め、 持続可能な社会の創り手を育む環境教育の推進

～持続可能な開発のための教育（ESD）の視点を生かして～

神奈川県相模原市立青根小学校 倉田 秀文

I 現状と課題

1 現状認識

中央教育審議会答申に、自然環境や資源の有限性等を理解し、持続可能な社会づくりを実現していく一つの手立てとして「持続可能な開発のための教育（ESD）」が示されている。そこには、「教科等を越えた教育課程全体の取組を通じて、子どもたち一人一人が、自然環境や地域の将来などを自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え実践できるようにしていく。」とある。

そこで本校では、10年程前より「地域とともに生きる学校」として地域の持続可能性と真摯に向き合い、地域に関わる多くの人や財産と関わり合いながら、森林に住む生き物の観察や稚魚の放流、伝統文化体験などの教育活動〔持続可能な開発のための教育（ESD）〕を行ってきた。

2 課題分析・アプローチの視点

本校は、全校児童7名の極小規模な学校である。相模原市の西北部に位置し山梨県との県境にあり、周囲は山林と畑に囲まれた自然豊かな環境にある。青根地域の人口は約600人、少子高齢化・過疎化が進行しており地域の持続可能性が喫緊の課題である。そこで、生活科・理科・総合的な学習の時間（以下、総合的な学習）を中心に、人と関わる活動や自然の中での体験活動を重視した教育活動を推進し、持続可能な社会の創り手を育みたいと考える。

II 研究の概要

1 研究のねらいと視点

自然の中での活動を大切に、小学校の裏山にある学校林（あおりん）で思いきり遊んだり、伐採した木を使って大きな工作をしたりと、これまで青根ならではの良さを活かし地域と関わり合いながら教育活動を行ってきた。しかしながら、子どもたちの学びの様子を見てみると、一生懸命活動に取り組んではいるものの、「地域の良さや課題を見つけ、良さを自分なりに広めたり、課題を解決したりする」までには至っていない現状がみられた。そこで、より自分ごととして捉えられるよう、今まで取り組んできた様々な活動についてESDの視点からも再認識を図った。

引き続き、生活科・理科・総合的な学習や日々の教育活動を通して、自分や地域を大切に「自分ができることを考え実践できる子」の育成をめざした研究とした。

2 研究実践

- 実践例「川の上流域（青根）から下流域（茅ヶ崎）までの観察調査」（県企業庁上下流域交流事業活用）

① 活動の概要

青根（水源）から茅ヶ崎（海）までの川の水質調査。

② ねらい

川の上流域（道志川青根）・中流域（相模川高田橋付近）・下流域（茅ヶ崎）に生息している水生生物の観察や水質調査を通して身近な自然に関心を持つとともに、環境を守るために自分たちができることを考える。

③ 調査内容

ア 水生生物調査・・・川にすむ生き物（指標生物）を調べることで、水のきれいさを判定する。

イ 水質検査・・・バックテストを行い、水のごよれを測定する。

ウ 聞き取り調査・・・釣りや散歩などで、日頃川の様子を見ている人に聞き取りをする。

④ 調査結果

ア 自分で水生生物を採集し、どんな生物が多く生息しているかがわかった。採集した水生生物（指標生物）によって、各地の水質を実感することができた。

イ 川の水を採集し、バックテストを実施した結果、青根流域にはきれいな水質でなければ住めない魚がいることや、生活排水の濃度が低い数値であることで、水のきれいさがわかった。

ウ 上流域、中流域、下流域の三地点で観察調査を経年で行ったことで、比較して考えることができた。

III 成果と課題

1 成果

自分たちの住んでいる地域（上流域）は、他と比べて、川の水がきれいであることがわかり、青根地域の良さをあらためて知ることができた。そこで、水源地域の環境を守らなければという思いから、少しでも食器用洗剤使用を少なくして貰おうとアクリル（エコ）たわしを近隣の民家に配付する活動などを行った。また、学習発表会に於いて、生活科・理科・総合的な学習、ESDで関わった方や地域の方を招き、学んだことや自分の思いを報告し、地域で得た学びを地域に戻したり、地域以外にも発信したりすることができた。

2 課題

引き続き地域に根ざした学習活動を実践する。様々な活動から課題を整理し、課題解決にむけた実践力を養いながら、自主的・意欲的に学ぶ子どもを育成したい。

IV 提言

地域の特色や環境が活かされる教育課程の編成や、体験的・社会的な学習活動の展開を見通し実施できる教員の育成がとても大切である。とともに、校長が地域の特色や環境を知り、地域と顔が繋がる必要があると考える。